

ひらほく新聞



ひらほく新聞で検索!
 ★ホームページ ひらほくランド★
<http://www.hirahoku.com/>
 ☆バックナンバー含め ひらほく新聞を
 閲覧 ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

生きる力が湧いてくる 日本の偉人の物語

これまで評価をしない教科外の活動とされてきた「道徳」が、小学校で二〇一八年度、中学校では一九九年度から「特別な教科」となります。ただ、学習の理解度や達成度を数字で示すのはそぐわないので、児童生徒の評価は文章で表すそうです。

この度、何度も取り上げてきました、愛してやまない(笑)博多の歴史、白駒妃登美さんが、新著「子どもの心に光を灯す日本の偉人の物語」を発売。有難い日本の先人たちの教えをあらためてしっかり学び、未来へと引き継いでいく私たちの責任。そのために、小中学校の「道徳」授業にぜひ活用していただきたい最幸に素晴らしい内容です。深く味わい学びたい、語り継ぎたい厳選一五編のなかから、一編より抜萃、ご紹介します。

今からおおよそ百年前の一九一八年、第一次世界大戦が終結し、ポーランドはロシアから念願の独立を果たしました。しかし、極寒の地シベリアには強制労働をしいられた多くのポーランド人がおり、また親を失った数多くの孤児たちもいました。大ロシアと交戦中のポーランドには、子どもたちを故国へ送り届ける余力はなく、最後の望みを託したのが日本でした。

『子どもたちの心を慰めた日本人の善意』
 一九二〇年から一九二二年にかけて、あわせて七百六十五人の子どもたちが、はるかシベリアから日本へやってきました。日本赤十字社は、孤児十名に一人の割合で、ポーランド人の大人も一緒に招くという、手厚

い配慮まで見せました。言葉も習慣も違う子どもたちを世話するには、ポーランド人の付添人をつける方がよいと考えてのことです。なんと太っ腹なんですよ。そして、とことん相手の立場で考える姿勢が、素敵ですよ。

そんな彼らを待っていたのは……日本人の溢れる善意でした。日本中から義捐金が寄せられ、衣類やお菓子、おもちゃや人形も届けられました。歯科治療や散髪のボランティアを申し出る人たちが、歌や音楽で傷ついた子どもたちの心を慰めようとする人たちも、後を絶ちませんでした。

そして、大人に連れられ、お見舞いに訪れた日本人の子どもたち。その様子を、ポーランドの孤児の一人は、次のように語っています。「日本の子どもたちは、私たちが寂しがらないように、一緒に遊んでくれました。それがとても楽しくて、仲良く遊んでいる間は両親のことも思い出さないうほどでした」

楽しい時間は、あっという間に過ぎていきます。別れに際し、日本の子どもたちは、自分が着ていたチョッキやお気に入りの髪飾りを、そして大好きなおもちゃや人形を、迷わずポーランドの子どもたちに手渡したといひます。

これは、大正時代のお話です。今のように物が豊かだった時代ではありません。それでも、日本人の心は、こんなにも豊かだったんですね。

子どもたちの心に光を灯す
 日本の偉人の物語
 白駒妃登美
 歴史を学ぶと、希望が生まれる

『日本に伝わる「惻隱の情」という美德』

日本人が、古くから大切にしてきたものの中に、「惻隱の情」があります。

しばしば「思いやりの心」と訳されますが、惻隱の情と思いやりの心は、まったく同じというわけではありません。思いやりの心を持つことは、もちろん大事ですが、困っている人を見たら、放っておけない、つい手を差し伸べてしまった……そんな、やむにやまれぬ思い、行動を伴う思いやりが、「惻隱の情」なのです。

先人たちが大切に育んできた美德を、当時は、幼い子どもたちまで共有していたんですね。

看護婦をしていた松澤フミさんという若い女性は、腸チフスにかかった子どもを、片時も離れませんでした。当時、腸チフスは、罹ったら最後、十中八九、死に至るといわれていました。

「この子は、もう助からない。それなら、せめて私の胸の中で死なせてあげたい」と、フミさんはいつていたそうです。

彼女の献身的な看護を受け、その子は奇跡的に回復しました。でも……松澤フミさんは、このときの看病がもとで、腸チフスに感染し、亡くなったのです。

また、こんなポーランドの女の子の回想もあります。「ひどい皮膚病にかかって

いた私は、全身に薬を塗られ、ミイラのように白い布に包まれて、看護婦さんにベッドに運ばれました。その看護婦さんは、私をベッドに寝かせると、布から出ている私の鼻にキスをして、微笑んでくれました。私はこのキスで生きる勇気ももらい、知らず知らずのうち

に泣き出していました」
 日本に到着したとき、子どもたちは、みな青白く痩せこけていました。内蔵の病気や皮膚病を患っていたり、栄養失調になっていたり……

そんな彼らが、ひと夏を日本で過ごし、人々の愛情に包まれ、まるで別人のように元気をみなぎらせたのでした。それは大変に喜ばしいことではありましたが、しかし、それは同時に子どもたちが故国ポーランドに帰る日が近づいていくことを意味していました。

「誰もが、このまま日本にいてくれる望んでいました。太陽が綺麗で、美しい夏があり、海があり、花が咲いている日本に……」

子どもたちは、そんなふうに感じてくれていたそうです。

そして、お別れの日。送られるポーランドの子どもたちも、見送る日本人も、涙、涙、涙……。七百六十五名に及ぶポーランドの子どもたちは、故国ポーランドに向けて、順次旅立っていきました。

子どもたちを送り届けた

日本船の船長は、毎晩、ベッドを見て回り、一人ひとり毛布を首まで掛けては、子どもたちの頭を撫で、熱が出ていないかどうかを確かめたといひます。

「もしお父さんが生きていれば、お父さんの手は、きっとこんなに大きくて温かいんだらうなあ」

と、薄目を開けて、船長の巡回を心待ちにしていた子どももいたそうです。

この子たちは、帰国後、孤児院に収容され、それぞれの人生をたくましく生き抜いていくことになりました。たったひと夏の経験でしたが、日本人から受けた愛情が、彼らの生きる力になったことでしょう。

「日本人は貧しい。しかし高貴だ」
 こう述べたのは、大正十(一九二一)年から昭和二(一九二七)年まで駐日フランス大使を務め、詩人としても有名なポール・クロデルです。クロデルの言葉は、以下のように続きます。

「世界でただ一つ、どうしても生き残ってほしい民族を挙げるとしたら、それは日本人だ」

そう、私たちのご先祖様は、こんなにもカッコよかったのです。

世界から賞賛された「美しい生き方」、そしてそのベ

白駒の原点

白駒さんの新刊を有難く拝読した翌日、これまで何度も記事をご紹介してきた「みやぎ中央新聞」の「神奈川読者会」があり、参加してきました。念願叶い、魂の編集長、水谷もりひとさん、くろみ社長にお会いすることができました。

参加者は80名ほど、「みや中読者に悪い人はいない」という話題が出ましたが、みな笑顔がとても素敵で、最幸のエネルギーが生まれ、共有拡散した、とても素晴らしい時間、空間でした。

水谷編集長の感動溢れる講演では、白駒さんの伝えたい思いと同様、「日本人の心はどこから来たのかを知ること」がテーマでした。少しご紹介します。

私たちが生かされているのは、「太陽」のおかげ。太陽崇拜は天照大御神。日本人は、古代より太陽を尊び、太陽のような心を持った民族で、争いごとを嫌い、大きく和する大和民族。そして、太陽は国名になり、国旗になりました。

もうひとつ日本人が大事にしてきたこと。生かされている、その生命の原因とは……『父母』。古語で「口身さん」とは？「口」は太陽、「身」は身体。つまり、母は命懸けで命を生み、命懸けで育てる太陽のような人。

そして、そんな尊い女性を命懸けで愛し、守る男のことを「尊い人」は「トトさま」「おとうさん」。

神は日身は太陽。太陽のような温かく、広く、明るく、許しと慈悲の心を持つ。聖徳太子が定めた十七条憲法の初めにあるのは……『和を以て貴しと為し、忤うこと無きを宗と為よ』。これは、和を何よりも尊いものとし、争わないことを根本にしなさい。という意。

日本独特の思想とは……『いい加減』な思想。正しい者と正しい者がぶつかり合うと戦争になる。加減のいいところで「水に流す」こと。

終戦後、GHQによる日本占領政策。マッカーサーが「初めて神のごとき帝王を見た」と昭和天皇に驚愕し「天皇制も残さなければ」としたうえで実行したのは、「60年殺しの刑」。学校教育を変え、60年かけて日本精神を骨抜きにした。

ところが、戦後66年、あの東日本大震災。あの最悪の状況下でも、列を作って秩序を守り、略奪もなし。その日本人の姿に米国が、そして世界中が驚いた。

豊かな自然、文化、自由と平和、安全な社会、和を乱さない精神性……。戦後、骨抜きにされ、きちんと教育されてこなかったはずなのに、なぜ？。そう、ただが70年では

ピクともしない、世界最古二千年の歴史が刻み込んできたDNAが、私たちにしっかりと受け継がれているのです。

これに関して、具体的な素晴らしいエピソードをいただきましたが、紙面の関係上、結びのお話……。

いま、こんな話を知らなくとも若者にはちゃんと、ボランティア精神や思いやりがある。でも、こういう太古からの日本人の精神を知ったかどうか。この国の若者たちはもともと、この国のために、いいものを残していこうと頑張ると思います。

『来たときよりも美しく』という言葉があります。遠足に出掛けた公園で、帰る時に、ゴミとか片付けて、来たときより綺麗にして帰りましょうと先生が言います。しかし、本当の意味は、「とき」という言葉は、『時代』のことです。

「自分がこの日本に生まれきたとき(時代)よりももっといい国にして、子や孫にいい国を残して、この世を去っていきましよう」という教えです。

我々の先祖たちがそうやってきてくれたおかげで、私たちは世界稀に見る天皇制が二千年も続いている、素晴らしい国に生きています。ぜひ、子どもや孫たちのために、いい国を、良い環境を残していけるよう、今を生きる責任として繋いでいきましよう。(おわり)

コミュニティの力

平塚商工会議所主催の講演会に参加。講師は、「カンプリア宮殿」にも出演、日本の商店街活性化の「成功事例」として話題の、香川県高松市「高松丸亀町商店街」の再活性の仕掛け人、古川康造氏(高松丸亀町商店街振興組合 組合長)。

過疎化・高齢化が進展するコミュニティ、商店街の衰退が大きな課題のなか、素晴らしいのは、事前に予測していたというところ。最大特徴は、地元住民が中心となり第3セクターのまちづくり会社を立ち上げた初の民間主導型という点。

難題は、何より「土地問題」。その解決法は、「土地の所有権と利用権の分離」。地権者は土地を所有し続け、まちづくり会社と60年の定期借地権契約をし、土地を貸し出す。建物はまちづくり会社が所有し、運営する。

次の問題は人口流出。目玉は、ライフインフラの再整備。業種の再編成を行い、診療所など暮らしを支える機能を充実、買物や全てのサービスを商店街で可能にする環境へ。街区の上部を居住スペースにし、後方支援の大病院と提携した診療所の医師が、居住区の部屋へ在宅往診可能の、新しい町医者スタイル。自宅での終末医療まで想定した発想は本当に驚きの一言。

計画進行条件として「全員同意型」をとり、反対者もあるなかで達成した最大要因は、脈々と400年引き継がれてきたコミュニティの力。普段小事でケンカもするが、いざというときには一致団結するという地域のコミュニティが見事に現存していたからだという。

定期借地権期間終了、60年後に帰っては？権威の専門家と徹底的に検討した結果は、10年先の予想も不可、60年先なんて誰にも予測不可能だから無駄な議論は無意味！となったという。そして、その60年後更地の時が必ず来るという大前提で、期限があると10年に迫ったころ、自分たちの孫の世代が、白紙のうえで次の60年へ向けた新たな街づくりをしてくれるだろうと期待、それがまさに、じいちゃんからのプレゼントだ！と。

大自然が警笛？

物があふれかえり、便利さと引き替えに、私たちは大切なことを忘れてしまっていないだろうか。今月号を通して伝えたいこと……。

この夏、デジタルアーツ発表の、未成年者の実態調査では、スマホ所持率は増加を続け、67.3%、なかでも女子中学生は52.45%から69.9%に急増したという。使用するようになってから、「寝不足」「頭痛」「イライラ」など、健康への悪影響も感じているようだ。

使用頻度が高いのは、LINE・ゲーム・YouTube。片時も離せなくなるという、これはもはや大きな社会問題。なぜそこまでハマるのだろうか。それは、身近で簡単にできるLINEやゲームより、楽しいこと、夢中になれることがないからである。あろう。もしも、身の回りの家族、大人も同様にスマホに没頭しているようだったら、何をか言わんや……。

特に男性なら一生のうち、睡眠時間以外で相当な時間を使う「仕事」。その時間より、スマホのゲームが楽しい？まさか骨抜きにされた？その姿に子どもたちは大人になって働くということをどう感じるのか？

三つ子の魂百までと言うが、年齢の言い方で、三つ・四つなど「つ」がつく九歳頃まで、ぜひ子どもたちのあらゆる可能性を引き出すための、多様な機会、経験を与えてほしい。習い事

やスポーツは決して強制せず、まずは経験する機会をつくり、自分からやりたいことを見つけさせてほしい。高校生になると、ゲームの頻度が減るといふ。それは、部活やバイト、進学など、頑張りたいことができなくなるかららしい。中学生にLINEやゲームを我慢させたいなら、協力して未経験なことを経験する機会をつくってあげて、夢中になれることを自ら見つけさせてあげること。まずは親も我慢、読書や新たな趣味等、新鮮な経験に挑戦、親子で向き合っていく。

先月、家庭教育プロデューサーの酒井勇介氏のセミナーに参加した。学習指導要領が大改革、家庭学習の重要性が問われてから四年、併せてスマホも大普及。実際の家庭環境はいかに……。

全国学力テストで常に上位の秋田県の子どもの生活習慣は、①土日の勉強、②復習学習が突出。小学六年生に復習の習慣の質問に、秋田県は64.6%、全国平均が32.2%のところ、何と神奈川県は、16.4%だという。

そこで生活習慣を変える手段として、新聞活用を提案。いきなり「読もう」といつてもそれは無理。一回3分、毎日でなくても「新聞の朝バラ」習慣。新聞記事から都道府県などのクイズを与えて一緒に楽しむ。知ってる漢字に○付けなど、低学年からゲーム感覚で向き合えたらしめたもの。

あらためてご紹介します。

